

失われた未来 〈1〉

Faulkner と「他者」—— 新世紀の批評に向けて ——

森 有 礼

I

William Faulkner (1897-1962) は、1920年代に本格的な創作活動を始めた。Scott F. Fitzgerald や Ernest Hemingway 等「失われた世代」の作家達と同時代を生きた彼は、故郷のアメリカ南部を主たる舞台とした物語に拘った。1930年代までには所謂モダニスト的な実験的手法で *The Sound and the Fury* や *As I Lay Dying*, *Absalom, Absalom!* と書いた前期作品群を発表した一方、1932年の *Light in August* に於いて人種混淆の主題を本格的に採り上げて以降、1950年代までには *The Unvanquished*, *Go Down, Moses*, *The Hamlet*, *Intruder in the Dust* と書いた、南部の人種や階級に関する問題をより意識した言わばポスト・モダニスト的作品を執筆するようになった。1950年の Nobel 賞受賞は彼の文学的業績の一つの記念碑だが、それ以降も晩年まで米文学界に多大な影響を持つ作家として活動し、その作品は 21 世紀を迎えた現在に於いても揺るぎない評価を受けている¹⁾。

Faulkner の批評的評価は、凡そ以上のように概括されよう。だがこうした評価自体は必ずしも作品の普遍的価値に還元されるものではなく、寧ろそれは作品を取り巻く様々なイデオロギー的状况に影響される。こうした問題は、例えば Faulkner の批評的評価について、当時の合衆国の社会史的な文脈から批判的に考察した Lawrence H. Schartz の指摘に明らかである。彼は、米ソ冷戦時代、反共政策を進める自由主義陣営が、共産主義陣営に対抗する個人の自由と道徳を標榜するアメリカ的モダニズム文学を必要としていた状況と、新批評派の批評家やニューヨーク知識人の「脱イデオロギーの美学と人間の実存的価値」を謳う文学的趨勢とが Faulkner に高いイデオロギー的価値を見出したことが、彼の作品の評価を築いたと論じ、Faulkner の批評的評価に対する政治的影響を指摘している。

同様の観点から Faulkner 自身の政治性についても指摘できる。例えば彼の Nobel 賞授賞演説は、当時の米ソ冷戦下の緊張を反映したものであり、また後年 Eisenhower 大統領の要請の下共産主義陣営に対する自由主義陣営の使者として "People to People Program" の代表を務めた (Williamson 299-300) こともある。こうした例は、Faulkner がいかに政治的・社会的及び歴史的な文脈と密接に関連していたかを物語っている。また

Schmartz の議論を見れば、文学作品の「普遍的」な「美的本質」を巡る議論それ自体が、歴史的文脈に依拠したイデオロギー的価値評価の実践に他ならないことは自明の理と言えよう。

この意味に於いて、批評的言説とは決して客観的で透明なものではなく、寧ろ批評実践がなされたその時々の政治的・社会的状況や特質を色濃く反映したイデオロギー的存在と言えよう。そして批評行為の継続が批評史という「歴史性」を獲得し得るのも、正にこの故である。精神分析的観点から言えば、批評言説は批評対象についてというより、寧ろ批評する主体が置かれた状況について語るのである。本論はこうした前提に従い、Faulkner とその批評言説のイデオロギー性について考察する。具体的には、Faulkner の小説テキストが J. Hillis Miller が「南部イデオロギー (the Southern ideology)」と呼ぶイデオロギー的準拠枠に依拠していることを確認すると共に、こうした準拠枠を構成する「メタ言説」とでも呼ぶべき Faulkner の批評的言説の特徴と限界を検証することによって、Faulkner のテキストとその批評的言説が共有するレトリックの特質と問題について考察する。

II

Faulkner の小説の大半は、彼の故郷である Mississippi 州 Lafayette 郡を元に創造された架空の世界を舞台としており、通例その土地の名を採って the Yoknapatawpha saga と呼ばれている。こうした設定も手伝ってか、Faulkner 批評は、しばしば Yoknapatawpha と呼ばれる物語世界と、実際の南部の共同体との関連について論じてきた²。一方で、前述した「新批評派」の代表的論客でもある Cleanth Brooks のように、Faulkner の特質を南部独特の「地域性 (provincial)」に根差したものであると指摘した上で、南部についての単なる社会学的研究や象徴探求としてではなく、文学作品としての言わば普遍的な「美的価値 (aesthetic value)」(6) に留意すべきだと提唱する批評家もいる (1-9)。

Brooks が Faulkner に見るのは、一個人を超えた「人間 (Man)」(6) の価値である (1-9)。だがこうした価値自体、「人間」の普遍性という近代的概念に則ったものに過ぎない。また先に挙げた Nobel 賞授賞演説にも、こうした普遍性に対する信頼が窺える。「南部」の挫折と破滅を描く Faulkner の小説はしばしば悲劇的な結末を迎えるが、彼はそこに単なる滅びの美学以上の価値を見出している。世界滅亡の脅威が日常化していた米ソ冷戦当時の状況を "Our tragedy today is a general and universal physical fear so long sustained by now that we can even bear it" ("Address upon Receiving the Nobel Prize for Literature" (723) と指摘しつつも、Faulkner は人類の不滅性と作家の使命について次のように語る。

I decline to accept the end of man. It is easy enough to say that man is immortal simply because he will endure: [. . .] I believe that man will not merely endure: he will prevail.

He is immortal, not because he alone among creatures has an inexhaustible voice, but because he has a soul, a spirit capable of compassion and sacrifice and endurance. The poet's, the writer's, duty is to write about these things. ("Address" 724)

現代の悲劇的状况を乗り越えて人間が「不滅 (immortal)」であり「耐え抜く (he will endure)」と語る Faulkner の確信は、未曾有の大破局に耐え抜いて「生き残る (prevail)」、不屈 (impervious) で普遍 (universal) な「人間」への絶対的な信頼に基づいているようだ。

だがこうした Faulkner の言葉は、自論を正当化する根拠を自らの内に持たない。Jean-François Lyotard によれば、こうした「人間の普遍性」に対する信頼は、近代の啓蒙主義的言説の、循環論的な自己正当化のメタ物語の過程／作用 (process) に過ぎない。

[T]he term *modern* [. . .] designate[s] any science that legitimates itself with reference to a metadiscourse [. . .] making an explicit appeal to some grand narrative, such as the dialectics of Spirit, the hermeneutics of meaning, the emancipation of the rational or working subject, or the creation of wealth. [. . .] this is the Enlightenment narrative, in which the hero of knowledge works toward a good ethico-political end — universal peace. As can be seen from this example, if a metanarrative implying a philosophy of history is used to legitimate knowledge, questions are raised concerning the validity of the institutions governing the social bond; these must be legitimated as will. Thus justice is consigned to the grand narrative in the same way as truth. (Lyotard xxiii-xxiv)

要約すれば、「近代」とは、人間の合理的精神の解放と幸福の追求を目的とした「啓蒙の物語」に定義される時代であった。だがそうした「大きな物語 (grand narrative)」自体が「近代」というイデオロギー的言説の自己正当化の身振りだとすれば、人間の不滅性を「同情と犠牲と忍耐の力を持つ精神」の普遍性に求める Faulkner も、そこに一個人を超えた「人間」の価値を見る Brooks のような批評態度も、共に「近代的人間精神」の信奉というイデオロギー的準拠の言わば反復要約 (recapitulation) に過ぎない。Schmartz の指摘を繰り返せば、こうした人間の「普遍性」への信頼それ自体が近代イデオロギーの歴史的産物であると共に、その出自 (identity) を韜晦せんとする「近代的精神」の自己抑圧の結果なのだ。

一方 Faulkner の「不滅性」を、読者の解釈 (interpretation) と、それを阻むテキストとの弁証法の過程に見ようとする、所謂ポスト構造主義的批評も存在する³。Kartiganer の次の指摘は、そうした立場から Faulkner 作品の特質を説明する一例となっている。

Each of [Faulkner's] major novels [. . .] stages a collapse, or at the very least refuses to dispel the dubiousness of, the most imaginative attempts within the text — and therefore without — to bring its materials to some kind of valid order. The pleasures of that order are such that we, all of us, find it both necessary and justifiable to cling to

it, even as we know that some absolutely crucial event or situation in the text remains unclear, unexplained. Significantly, this gap in our knowing of the text — which seems a gap in the text's knowing of itself — has the effect of enhancing the power of its images, as if rendering them all the more brilliant for the revealed blankness of their background. The gap is a summons to attend to the particulars, inspired by the pervading sense that the particulars are ultimately beyond, or beneath, interpretation. (Kartiganer xxi)

Kartiganer は、「Faulkner が米モダニスト文学の正典の地位を占めている」(xiv) 理由を、テキストの「妥当な秩序」への欲求を拒む作品の「頑なさ (recalcitrance)」(xix) に見出すと共に、解釈を誘いつつ拒絶するこうした「ギャップ」を、Faulkner 作品の特質と見做す。

[Faulkner's] unique modernism is his passionate pursuit and rejection of a dream of rhetorical adequacy — the supreme fiction — analogous to his relationship to a Southern culture he also appropriated and opposed. The novels turn on us because they are always about the insufficient attempts of language to control, to articulate an unfathomable Otherness, with the writer tortuously divided between the language he gorgeously assumes and the unwordable Other he desires to keep in motion, uncontained. The result is the rhetorical failure that triumphantly confirms that language has dared everything. (Kartiganer xxiv)

Kartiganer は、Faulkner に対する読者の「計り知れない他者性を分節化しようとする……不完全な試み」と、それに抵抗する「言葉に出来ない他者」との間の「修辭的正確さの夢の探求と拒絶」が齎す「修辭的な失敗」が、逆説的に「言葉があらゆることに挑戦する」彼の小説の特徴である見做す。だが読者を Kartiganer の指摘するような「試み」へと誘うテキストの「計り知れない他者性」には、常に人種の表象に関する重大な問題が付き纏う。

Faulkner の作品は、主に南北戦争後の南部の白人社会を背景とした、近親相姦 (incest) と人種混濁 (miscegenation) に対する登場人物達の強迫観念を扱う。それは、前述の Miller が、彼の *Absalom, Absalom!* 論で "patient amazed recapitulation that characterizes human consciousness for Faulkner may be defined as subjection to a set of ideological assumptions not seen to be ideological" (198) と定義する「反復強迫 (recapitulation)」に他ならない。そしてその原因となるのは、Miller が「南部イデオロギー」と呼ぶ「人種、性差、階級に関する様々な前提」(197)、つまり南部社会に於ける白人と黒人、男性と女性、そしてプランテーション貴族と貧乏白人^{ブア・ホワイト}との間の差異を定義する様々な文化的前提である。

こうした諸前提は、それ自体「当然なもの」と見做され (taken as natural) (Miller 198) ながら、登場人物達の／と世界を巡る解釈に Kartiganer の言う何らかの「妥当な秩序」を付与する。換言すれば、南部イデオロギーと呼ばれるこれら諸前提は、世界と

人間との諸関係を常に／既に所与のものとして規定されたものとして「自然化」する機能を果たすのだ⁴。

元より Miller の言う通り、イデオロギーとは「誤った前提 (erroneous assumptions)」に基いて、「言語的現実を物質的、または現象的現実と混同 (confusing linguistic with material or phenomenal reality)」(198) せしめるような「虚偽、過誤、逸脱 (falsehood, error, aberration)」(195) に過ぎない。だが、先の Miller の言葉がいみじくも暗示するように、イデオロギーへの屈従はそれがイデオロギー的な見せ掛けを採っていない場合にこそ完璧となる。同時にその自明性を疑問に付すような存在は、それ自体に対するイデオロギー的脅威を表象／代理する (represent) 「他者」としての役割を割り振られることとなる。

従って Faulkner にとっての「他者」とは、南部イデオロギーがその「外部」にあるものとして前提する存在となる。寺沢みずほは Faulkner の物語世界を、「人間には抵抗しようがない滅びの宿命……という巨大な歯車を止めようと死にもの狂いの努力をする」(10) 男性の物語とした上で、旧南部の貴族制という「あるべき世界」(13) と、それを滅ぼす「墮落・穢れ」(14) として女性と黒人を対置させた二項対立がその物語を前提していると説明しているが、この図式に従えば、Duvall が指摘するように、女性、殊に婚外交渉とそれに続く庶子の出産によって、南部白人貴族制を中核とした父権的社会の基盤に亀裂を生ぜしめる「墮落した」女性は、父権社会の正統性と主導性を脅かす潜在能力を秘めた忌避されるべき存在と見做される (119-32)。また白人の人種的純粋性が、このイデオロギー世界に於ける社会的優位と正統性 (legitimacy) とに直結している事実に着目すれば、その枠内に於いて、黒人の血による人種混淆がその純血性に対する危機と見做されるのも理解できる⁵。

総じて Faulkner の小説は、旧南部白人貴族社会の没落を、例えば *Light in August* や後述の *Absalom, Absalom!* の様に、黒人と白人との人種混淆が齎す不可避な神の「呪い」という運命論的な文脈で捕えつつ⁶、一方でこうした大破局に「耐えて」生き延びる周縁的 (marginal) な存在、殊に黒人や貧しい白人に対する一種の憧憬も描き出す。ここでは、自然対文明、男性対女性、白人対黒人、南部対北部、過去対現在という二項対立のヴァリエーションを採って、人種、性差、階級間の境界侵犯を巡る事件が、南部イデオロギーの措定する神話的世界の、外部からの侵入者による蚕食の物語として描かれている。

こうして見ると、先に挙げた Brooks や Faulkner のような態度が、「近代」の諸物語に基づく普遍的人間性の脱政治性の言説の自己反復での身振りに過ぎなかったのと同様に、ここで見た南部イデオロギーの言説もまた、自らが前提する他者の存在を通じて自身の正統性を主張すると言う論点先取の虚偽を犯していると言わざるを得ない。換言すれば、文学作品はそれ自体文化的且つ歴史的な文脈に規定された政治的言説であると共に、そうした前提を「自然化」することで、そのイデオロギー性を隠蔽しつつ示唆してきているのだ。

こうした仮定に基づき、次節以降では *The Sound and the Fury* と *Absalom, Absalom!* を中心として、南部イデオロギーに纏わる登場人物達の撞着的状況とその限界について更に分析を進めてゆきたい。そうすることで、Faulkner の物語世界が依拠する南部イデオロギーという文化的準拠枠の本質について、より詳細な検証がなされるであろう。

III

The Sound and the Fury は、南北戦争を経て没落した Yoknapatawpha 郡の街 Jefferson の旧家 Compson 家の、1928 年の時点での家庭崩壊を主題とした四章立ての物語であるが、その第二章では、この章の語り手で、Compson 家の長男 Quentin の妹 Caddy の処女喪失と性的墮落に対する強い近親相姦的 (incestuous) 執着が窺える。妹が何人もの恋人と関係を持ち、その結果父親が分からない子供を身籠って以来、彼は「自分は妹と近親相姦を犯したのだ」という強迫的妄想に囚われる。妊娠を誤魔化すため、Caddy が性急に別の男性と結婚して彼の元を去った後も彼はこの妄想から逃れられず、遂には水中への投身自殺に到るのだが、奇妙なことに、一方でその処女喪失によって永遠に死んだ=失われてしまったと感じている筈の妹が彼の元を離れてゆくその瞬間の記憶を、彼は回想の中で反復的に追体験し続ける。こうした Quentin について Faulkner は次のように述べている。

QUENTIN III. Who loved not his sister's body but some concept of *Compson honor precariously and (he knew well) only temporarily supported by the minute fragile membrane of her maidenhead* as a miniature replica of all the whole vast globy earth may be poised on the nose of a trained seal. Who loved not the idea of the incest which he would not commit, but some presbyterian concept of its eternal punishment: he, not God, could by that means cast himself and his sister both into hell, where he could guard her forever and keep her forevermore intact amid the eternal fires. ("Appendix" 709-10, 強調は論者による)

「妹のちっぽけで弱々しい処女膜によって危うく一時的に支えられている家名」や「妹を地獄の永遠の業火の中で無垢のまま護り続ける」と言う「観念」に拘る Quentin が、時代錯誤的な旧南部の騎士道精神や家父長制イデオロギーに縛られていることは一目瞭然だが、こうした「観念」によって現実の大破局を自分なりの物語に書き換えようと試みる彼の態度は、それ自体 Miller の言う「言語的現実と物質的現実との混同」に他ならない。作中でいみじくも Quentin の父 Mr Compson が語る "it was men invented virginity not women" (78) という言葉は、上述の Quentin の妄想の陰画となっている。処女性とは女性 (=Caddy) の本質ではなく、寧ろ男性 (=Quentin) にとって、その強迫的な妄想を形成するために前提される観念としての女性、即ち南部イデオロギーによって措定された「虚偽」なのだ。

だが、問題は Quentin がこうした外傷に徹底して拘泥する点だ。彼の内的独白からな

る第二部を通じて、彼は妹 Caddy の処女喪失に対する自身の苦悩と、それに続く「妹の喪失」の記憶を反芻しつつ Cambridge の街を放浪する。そればかりでなく、物語中盤では迷子のイタリア人少女の面倒を見つつ、その兄に誘拐犯と間違われてその少女を奪い返されるという具体的な行為の段階での外傷経験までも、半ば無意識的に反復している。

こうした Quentin の様子には、彼が拘泥している外傷的核の本質が、彼が妹の処女喪失と関連付けて考える、南部のイデオロギー的規範からの逸脱と言うよりは、寧ろそれ自体現実からの逸脱である南部イデオロギーが内包する、ある種の限界に対する不安を感じさせるものがある。と言うのも、彼のこうした強迫的回想は、最終的にそれが目指すものが、外傷からの回復と言うよりは外傷の反復追経験それ自体であるように、換言すれば、そうした回想自体が Kartiganer の言う「言語を統御せんとする不完全な試み」の実践であるように見えるからだ。同時に Quentin のこの外傷的核とは、Kartiganer が「読者が何らかの妥当な解釈を齎そうとする試み」に抵抗する「テキストに於ける読者の知識の間隙」と呼ぶある種の欠如を巡って構成されているようにも思えてくる。

確認すれば、Quentin の Caddy 喪失を巡るこうした反復行為は、先に Miller が指摘した「人間の意識を特徴付ける驚くべき忍耐強さを持った反復要約」に他ならない。彼の強迫的な外傷的記憶の反芻は、単なる現実逃避ではない。それは、失われた対象が最早実際には決して回復し得ないことを認識しつつもそうせずにはいられない程に強烈な衝動が齎す「喪失」の原体験の反復であり、それを通じて今や失われたものがかつて存在していたということを確認せんとする死物狂いの試み、つまり、現在の Caddy の墮落を以て南部イデオロギーの理想を象徴していた彼女の処女性を逆説的に保証せんとする試みなのだ。

こうした心的機構について更に論じるためには、改めて Kartiganer の言う「大文字の他者 (the Other)」の本質について確認する必要がある。Jacques Lacan は、こうした「他者」の機能を「言語が、あるメッセージの送り手が、自らのメッセージを反転させて受け取るような形式のコミュニケーションを構成する ("Human language [...] constitutes a communication in which a sender receives his own message back from the receiver in an inverted form")」(85) と定義する。これに従えば、「他者」とは我々のコミュニケーションの直接の対象となる特定の存在ではない。それは「『他者』表象のためのシニフィアン¹の作用の結果穿たれた裂け目に、主体の欲望が構造化されているのを見出すという状況 ("the condition that the subject has to find the constituting structure of his desire in the same gap opened up by the effect of the signifiers in those who come to represent the Other for him, in so far as his demand is subjected to them")」(Lacan 264; 強調筆者)、言うなれば、主体自身も知らない自身の欲望が、他者からのメッセージとして主体に齎されるような状況である。その限りで、「他者」とは「そこに向けて話す私が構成される場、そこに於いて、一方の存在によって既に返答が成され、またもう一方がその相手が話したか否かを決定するような場 ("the locus in which is constituted the I who speaks

to him who hears, that which is said by the one being already the reply, the other deciding to hear it whether the one has or has not spoken") (Lacan 141)、即ち、「私 (I)」がその発話の対象とそれへの返答を成す対象を共に占めるような場である。この意味で、"man's desire is the desire of the Other" (264) という Lacan の有名な警句^{アフオリズム}は正しい。我々は「他者」の欲望として／を通じてしか、「[何らかを] 欲する／求める／欲望する (desire)」ことは出来ないのだ。

この定義に従えば、南部イデオロギーの内部に棲む Faulkner の登場人物達は、世界の「大破局」^{カタストロフ}の到来を不可避の運命として畏怖しつつ、同時にそれが「他者」からの応答という形で実現／理解 (realize) することをも「欲望している」ことになる。前述した寺沢は、Faulkner の物語を「世界の不可避の滅亡に抗う主人公の闘い」と見たが、その登場人物達には、実際こうした滅亡に対する異様な執着が窺える。だが Lacan によれば、彼等のこうした抵抗は、常に／既にそれ自体自身の欲望の、無意識的な「実現」を希求する身振りなのだ。

ここまでくれば、Quentin の反復要約が何に対する身振りかは一目瞭然である。それは彼の「他者」に向けられた問い、つまり、それが己の欲望の答えを齎すと信じている、彼自身が措定した「場」に向けられた問いである。換言すれば、それは自らの欲望の何たるかが分からないまま欲望し続けずにはいられない者の、「何故自分は欲望し続けねばならないのか」、或いは「何故失われた対象は戻らないのか」という答えのない問いである。

従って、Quentin が最終的にこの問いへの答えを見出せぬまま（彼は妹を諦めて人生を生きることも選択できず、無論失った妹をいかなる形に於いても回復することも出来ない）、自ら命を絶つという *The Sound and the Fury* 第二部の結末が意味するものも見えてくる。それは彼の悲痛な問いにも拘らず、「他者」からの回答は決して得られないということ、つまり「他者」の本質的な不在である。この点について更に確認するために、ここで Juliet Mitchell と Jacqueline Rose による、Lacan の「他者」に関する次の引用を見てみよう。

Let us [...] start with lack, inscribed at the roots of the structure in so far as the subject is constituted in a dependency on the speech of the Other. From this point on, the particularity of his need can only be abolished in demand, a demand which can never be satisfied, since it is always the demand for something else. This is also why the particularity of need has to resurface in the desire which develops on the edge of demand. [...] the lack inscribed in the signifying chain through which the Other, as the only possible site of truth, reveals that it holds no guarantee, is in terms of the dialectic of desire a lacking in *jouissance* of the Other. That there must somewhere be *jouissance* of the Other is the only possible check on the endless circulating of significations — but this can only be ensured by a signifier, and this signifier is necessarily lacking. (116-17)

「他者」とは、主体が「他者」の発話に依拠して自らを構成する際の根幹にある、決して満足することのない欲望を生み出す欠如である。従ってそれは本質的に不在であることをまず確認しておく。そしてそれは「他者の享樂 (*jouissance* [enjoyment] of the Other)」という、それ自体必然的に「欠如している」究極の対象を前提としてのみ、主体が欲望すること（即ち主体が構成されること）を可能ならしめるような前提条件となっている。こうした状況に於いて初めて、主体は、「他者の享樂」を求めて止めどなく欲望することが可能となる。

だがここには本質的に不在の「他者」を欠如と見做すことでその存在可能性を前提するという矛盾がある。そしてこの矛盾こそが Quentin の反復強迫の核を構成している。Slavoj Žižek が「原初の嘘 (*primordial lie/ proton pseudos*)」と呼ぶこの矛盾は、人間の存在の核を構成する撞着である。Žižek は、Sigmund Freud がトリエステの精神分析医 Edoardo Weiss に充てた 1922 年 5 月 28 日付の書簡の⁷中の皮肉な逸話——スロヴェニア南部のシェコチャン (Škocjan) 地下洞窟で、当時の反ユダヤ主義的ウイーン市長 Karl Lueger に会った経験——に言及しつつ、人の意識に潜む虚構について説明する。「Lueger」という名の含意（独語の「嘘 (Lüge)」との音韻的類縁）を参照しつつ、Žižek は自己の深淵に在るものについて語る。

[W]hat we discover in the deepest kernel of our personality is a fundamental, constitutive, *primordial lie*, the *proton pseudos*, the phantasmic construction by means of which we endeavor to conceal the inconsistency of the symbolic order in which we dwell. [...] the 'natural state' of the human animal is to live a lie. Freud's uncanny encounter condenses, as it were, two closely connected Lacanian theses: the Master is unconscious, hidden in the infernal world, *and* he is an obscene imposor (sic) — the 'version of the father' is always *père-version*. In short, the lesson for the *Ideologiekritik* is that there is no *Herrschaft* which is not supported by some phantasmic enjoyment. (*The Indivisible Remainder* 1-2)

我々の意識の底にあるのはこうした「原初の嘘」に他ならない。それは我々の生きる世界の「象徴的な秩序に於ける一貫性のなさ」を隠蔽するために不可欠な嘘、つまり世界に *Kartiganer* の言う「何らかの妥当な秩序」、或いは *Lytard* の指摘する「大きな物語」が存在するかのように見せ掛けるために機能する「幻想の享樂」である。人はこの享樂の存在を信じる限り、つまり、未だ「他者」の手の内において「私」のものではない享樂（これについては、*Totem and Taboo* について論ずる次節で詳述する）が何処かにあるという嘘を信じるという誤謬の内部に留まる限りに於いて、自身の存在を支える象徴的秩序を生きているのだ。

こう考えれば、失われた妹を求め続けた Quentin が何故最後に死を選ばねばならなかったのかも理解できよう。彼が直面したのは妹の喪失が齎す絶望という実存的な問題ではない。彼が気付いたのは、その喪失感の源泉である「欠如」を巡る「嘘」が彼の欲望を構成する前提となっていたこと、つまりこの喪失それ自体が、本質的には不在であるよ

うな「他者の享楽」という幻想によって措定されていたに過ぎないということである。換言すれば、失われた妹を無垢なままに手元に留めておきたいと願う彼自身の近親相姦的な欲望自体、「他者の享楽」の作り出す「見せ掛け」でしかないということ、つまり、欲望とは常に「他者の欲望」に過ぎないという現実、即ち、近代合理主義的且つ自律的であるべき「私」という存在も、そしてその欲望の「自律性」も、所詮「享楽せよ」という「倒錯的な父 (père-version)」の命令に従っているに過ぎないということ、要するに、「私」の主体性とは「他者」という空疎な「場」から投射された影 (shadow) に他ならないことに気付いたからこそ、彼は死を選ぶのだ。

この意味で、Quentin はこよなくイデオロギー的な存在であると言えよう。彼の欲望は決して彼の個人的なものでは在り得ない。それは彼の思考や言動が依拠する南部イデオロギーの階級と性差に関する厳密な前提の反映であり、その意味で彼はこのイデオロギーの完璧な代理／表象 (representation) として機能している。第二章を通じて Quentin の視線が繰り返し足下に横たわる自分の影に向けられるのは故なきことではない。彼は己の影法師を、自身の自我の実体 (id-entity) の空疎な本質として見つめているのだ。

こうして見ると、*The Sound and the Fury* は、その表題が採られた Shakespeare の *Macbeth* に於ける主人公 Macbeth の独白 "To-morrow, and to-morrow, and tomorrow,/ Creeps in this petty pace from day to day,/ To the last syllable of recorded time [...] Life's but a walking shadow; [...] it is a tale/ Told by ad idiot, full of sound and fury,/ Signifying nothing." (5. 5. 24-28) についての完璧な解説となっている。人間の生の物語とは、詰まるところ影のような本質的「無を指示する (Signifying nothing)」に過ぎない。そこには「近代的自我」の理念が保証する理性的存在もなく (Told by ad idiot)、また神の啓示によって歴史化された始まりも時もない、永遠に無為なクロノスの時間が流れる世界⁸ (To-morrow, and to-morrow, and tomorrow, [...] Creeps [...] To the last syllable of recorded time)、即ち、Quentin が死を以て逃れようとした永遠の無一意味の世界なのだ。

同時に、*Macbeth* のエコーとしてこの作品を読むと、我々には「神の不在」というもう一つの現代的主題が思い浮かぶ⁹。だがこれについて考えるためには、Quentin が語り手を務めるもう一つの物語である *Absalom, Absalom!* を採り上げる必要があるだろう。

IV

The Sound and the Fury が、Faulkner の物語世界を規定する南部イデオロギーの階級と性差を巡る物語であるなら、そこにそのもう一つの要素である人種混淆の問題を加えた作品が *Absalom, Absalom!* と言えよう。この小説は、1830年代、まだ小さな村に過ぎなかった Yoknapatawpha 郡の街 Jefferson に現れた、Thomas Sutpen という男と彼の一族の興亡を、南北戦争による旧南部貴族の没落の歴史に絡めて描いた物語である。それ

は一つには、West Virginia の貧乏白人^{ブア・ホワイト}の少年に過ぎなかった Sutpen が、白人社会の階級的差異に気付いた結果、その越境を試みるという物語である点に於いて南部イデオロギーの階級的側面を表している。また、特にこの物語に登場する女性達のジェンダー的役割は、前述した Duvall の指摘する、Faulkner の女性達の四つの女性像——白人男性の結婚相手として理想的な淑女（所謂 the Southern Belle）、その対照にある、Caddy Compson を典型例とする性的に墮落した白人女性、そしてそのどちらにも属せず、独身のまま過ごす spinster の役割を演じる白人女性、最後に、男性の性的関心の対象として南部社会が容認している売春婦や黒人奴隷の女性達——のいずれかを割り振られている（119-32）という点に於いて、同じく南部イデオロギーのジェンダーの様相を描いている。だがこれらに加えて、特に白人と黒人の人種混淆の禁忌の問題が、先に挙げた近親相姦の禁忌と関連付けて扱われることが、*Absalom, Absalom!* を特徴付ける大きな要素である¹⁰。

Sutpen 家を巡るこれらの主題の展開は明確である。貧乏白人^{ブア・ホワイト}の身分から身を起し、自身の「計画 (design)」(212) に従って念願の白人プランテーション貴族の地位を得た Sutpen の嗣子 Henry は、Mississippi 大学で父 Sutpen の最初の妻の息子 Charles Bon (つまり Henry の異母兄) と出逢い、彼に心酔するようになると共に、妹 Judith に自身の近親相姦の欲望を、また Bon にその同性愛的欲望を投影しつつ、二人の結婚を願う。そして、父 Sutpen が二人の婚姻を禁じた後にもその成就に執着し、父の命に背いて Bon と共に南北戦争に参戦する。だが、Bon の母親に「黒人の血が混ざっていた (*part negro*)」(283) ことを知って、Henry は Bon を殺害し、自らも姿を消す。やがて Judith も Sutpen も亡くなり、最後には Bon の子孫に当たる白痴の黒人 Jim Bond を残して Sutpen 一族は滅亡する。そこでは *The Sound and the Fury* での主題であった近親相姦の問題が、黒人の血の散種が齎す白人の世界の没落という人種混淆の主題と併せて描かれている。即ち、近親相姦という文化的に「禁じられた」手段によってしか維持し得ない白の純粋性は、その禁忌故に、人種混淆という結末によって必然的に失われざるを得ないということになる。

Freud は *Totem and Taboo* で、近親相姦の禁忌 (incest taboo) とは、他の大多数の男性達に対して、欲望の対象である女性を独占していた父、つまり禁忌の発生以前に禁忌を破っていた唯一の存在である「原父 (primal father)」の殺害と、それに続く近親相姦に対する原罪意識の痕跡が齎す、エディプス・コンプレックス的構造を持つ文化的抑圧であると説明する (201-13)。だが Žižek によれば、この原父殺しの神話は、前節で論じた、「享楽」そのものの接近不能性を巡る「原初の嘘」を核とする Lacan 的文脈に於いても理解し得る。

In the Oedipus myth, the prohibition of enjoyment still functions, ultimately, as an external impediment, leaving the possibility open that without this obstacle, we would be able to enjoy fully. But enjoyment is already, in itself, impossible. One of the commonplaces of Lacanian theory is that access to enjoyment is denied to the speaking being,

as such. The figure of the father saves us from this deadlock by bestowing on the immanent impossibility the form of a symbolic interdiction. The myth of the primal father in *Totem and Taboo* complements — or, more precisely, supplements — the Oedipus myth by embodying this impossible enjoyment in the obscene figure of the Father-of-Enjoyment, i.e., in the very figure who assumes the role of the agent of prohibition. The illusion is that there was at least one subject (the primal father possessing all women) who was ale to enjoy fully; as such, the figure of the Father-of-Enjoyment us nothing but a neurotic fantasy . . . (*Looking Awry* 24; 下線は論者による)

Žižek が指摘するのは、Freud の「原父の神話」に内在する虚構性である。Freud の「原父」、つまり Lacan が「享樂——の——父 (the Father-of-Enjoyment)」と呼ぶこの存在は、我々が近親相姦の禁忌=享樂自体の「接近不能性」を説明するため措定された「神経症的幻想」に過ぎない。それは主体が欲望する限りに於いて、禁忌という形を以て、主体に対して世界の秩序を齎す「父の法」として機能する不在の「他者」、つまり主体の「世界」を構成するイデオロギーが措定する幻想の秩序、要するに主体の根幹にある「原初の嘘」である。

Freud は、近親相姦の禁忌の理由を、それが「原父」のみに許された（そして「原父」殺害の罪悪感故に自らに対して禁じた）享樂故であると説明する。だがここで議論されている禁忌の侵犯不能性とは、我々の通常の理解とは逆の意味を持つ。それは死んだ「原父」の絶対性故にではなく、実際には享樂それ自体の享受が不可能だからこそ禁じられているのだ。

従って Freud 的「原父」とは、「享樂への接近」の本質的否定が主体の欲望の前提条件である世界に於いて、かつてそれを手にした存在として、未だ「他者」の手の内において「私」のものになっていない「享樂の可能性」という虚構を主体に対して提示する純粹な見せ掛け、即ちイデオロギー的「他者」に他ならない。この意味で、Bon と Judith に対する Henry の同性愛的且つ近親相姦的欲望が決して実現しないのは当然と言える。それは南部イデオロギーが彼の倒錯的欲望を禁止するから実現しないのではなく、寧ろこのイデオロギーの内部では「内在的に実現不能」であるが故に、何重もの禁忌という体裁をとっているのだ。

それ故問題は、何故それが「内在的に不可能」であり、また禁止されねばならないかということだ。前述したように、この内在的不能性は *Absalom, Absalom!* では人種の禁忌に重ねられている。本作の特徴は、語り手達の語り、Henry による Bon 殺害の理由を巡る解釈の連鎖としてプロットを構成するというメタ物語的物語構造にある¹¹。そしてこの謎は、この理由を探りつつ、登場人物達の軌跡を辿る二人の語り手、*The Sound and the Fury* 第二章の主人公 Quentin と、彼の大学での友人カナダ人 Shreve の語りに、Sutpen と Henry、そして異母兄 Bon の声が言わば憑依する形で明らかにされる。物語の終盤近く、南軍の野営テントの中で Sutpen が Henry に Bon の秘密を告げる場面を見てみよう。

—You are going to let [Bon] marry Judith, Henry. . . . —He cannot marry her, Henry. . . . —He must not marry her, Henry. His mother's father told me that her mother had been a Spanish woman. I believed him; it was not until after he has born that I found out that his mother was part negro. (283, 下線は論者)

この科白は、Judith と Bon の婚姻は、それが必然的に異人種間の雑婚となるために禁じられるとも理解できる。だがここで注目すべきは、Sutpen がそれは「出来ない」と言った後に「してはならない」と言い直す点、即ち Judith と Bon との結婚の本質的不可能性 (cannot) が、禁止の命令 (must not) に先んじて言明される点である。この言明は、「父の姿は、内在的な不能性に象徴的な禁止の命令という形を与えることで我々を〔享楽への接近の不能性という〕袋小路から救う」という Žižek の指摘の典型例であることは言を俟たない。

この瞬間に、Bon は Henry の "male ideal" (Sykes 33) から "the nigger that's going to sleep with your [Henry's] sister" (286) へと変化する。苦悩する Henry に Bon が告げる "So it's the miscegenation, not the incest, which you [Henry] cant bear." (285) という科白は、兄妹の近親婚という「純粋で完璧な (pure and perfect)」(77) 理想と、その決定的侵犯である異人種婚とを同時に体現する Bon のイデオロギー撞着性を表している。この後に続く Henry の Bon 殺害は、前節の Quentin と同じ類の苦悩に基づく。近親相姦が象徴する究極の純血性に対する欲望を人種混淆という悪夢に転ずるのは、南部イデオロギーの人種的前提を破って、黒人の血を引く妻と最初の結婚をした父 Sutpen である。だがこうした父 (=「原父」) の息子に対するエディプス的な意味での絶対的優先性を、「父は常に／既に息子の欲望の対象の占有者である」という形で理解すべきではない。それは逆に、Lacan の言う「享楽の父」の根本的な猥褻さ、つまり「他者」の享楽を占有する「原父」という Freud 的解釈の陰画、南部イデオロギーが前提する人種混淆の禁忌の最初の侵犯者としての父の姿を示唆している。つまり「原父」という「享楽の父」の猥褻さとは、禁忌の侵犯に対する主体の脆弱さと、そのイデオロギーの核にある根本的な欺瞞を意味しているのだ。

従って、禁忌とその侵犯に関する「原父」の先行性は、通常とは全く逆の意味で理解されねばならない。それは、禁忌の本質的な無根拠さを意味する南部イデオロギーの侵犯が、その子孫達が如何なる努力を以ても雪ぎ得ない「原罪」としてその起源に常に／既に存在しているという点に於いてのみ、後に続く者達にとって絶対的先験性を持つのだ。

この文脈に依拠すれば、禁忌とは、それを保証すべき「原父」の法の根本的な無意味さを隠蔽するための方便に過ぎない。こうした法の無力さは、自らの「計画 (design)」を、我知らず犯した黒人の血を引く最初の妻との結婚という「過ち (mistake)」(212) に端を発する一連の悲劇によって失敗に終わらせる「無力な父」としての Sutpen の姿に象徴される。だがここで確認したいのは、Sutpen の父としての無力さを描く *Absalom, Absalom!* の物語が、前節の「他者」の虚偽性についての議論を追認する形で

展開しているということだ。

繰り返せば、「他者」とは、主体をして自身が享楽への接近から疎外されているかのように信じさせることによって、逆説的に主体にある種の「欠如」を巡る喪失と回復の「物語的秩序」の幻想を抱かせる存在、つまり本節で扱った「享楽の父」として、主体の欲望を喚起する存在である。こうした「他者」の機能を前提とすれば、前節の終りで示唆した神の不在の主題は、*Absalom, Absalom!* に窺える「原父」の無力さと重ねて理解出来よう。

Henry が Bon と Judith の近親婚に拘泥したのは、南北戦争での南軍の敗北が決定的となった時期であった。既に自分達の南部が神に見捨てられていることに気付いた Henry は、兄と妹の結婚によって没落しつつある南部の「秩序」を象徴的に維持しようと決意する。

[N]ow it wont be much longer now and then we wont have anything yet: honor nor pride nor God since God quit us four years ago only he never thought it necessary to tell us; [...] — Yes. I have decided. Brother or not, I have decided [to marry Bon and Judith].
(283)

だがこの直後、彼が父から Bon の出自の秘密を告げられ、兄を射殺せざるを得なくなるに到って、神の不在と父 (= 「原父」) の無力さが暴露される。「享楽の父」である Sutpen の原罪は、Bon の血の秘密を通じて南部イデオロギー自体の恣意性をも明らかにする。

「神に見捨てられた」と直感する Henry が望むのは、Bon と Judith の近親婚による自身の欲望の代償的成就であった（近親相姦の禁忌を破ることへの Henry の覚悟は、先に引用した彼の言葉に明らかである）。だが彼のそうした欲望自体が、父による人種混淆の実践によって不可能とされていたことに Henry は気付かざるを得ない。*The Sound and the Fury* の Quentin 同様、妹に仮託して自身の主体的秩序を象徴的に維持せんとした Henry が最後に対峙するのは、越境不能な筈の人種的境界の決定的な曖昧さとそのイデオロギー的無意味さである。こうした矛盾を前に、Henry は「享楽の父」の法の定める南部イデオロギーと、自身が直面する「あり得ない」現実との間で引き裂かれる。この時彼は自身では決して知り得ない己の欲望の本質、つまり「他者」の奥底にある「原初の嘘」と対峙する。

従って、Henry が Bon を殺害し逃亡したのは、彼が近親相姦と人種混淆という二重の禁忌を侵すことが出来ないからではない。逆に、その余りに安易な侵犯／越境可能性が齎す、自身の主体の自律性を圧倒するような脅威故にである。彼が最も恐れ、逃走するのは、彼を倫理的に規制してきた南部イデオロギーという神の恣意的な秩序の彼岸に見出した、こうした自我の実体 (id-entity) の本質的無-性という虚無的な「現実」からなのだ。

だがこうしたイデオロギー的秩序の崩壊は、Henry にとっては、神が自分を見捨てる「原因=理由 (cause)」でもある。彼の 40 余年に亘る逃亡生活を多少なりとも支えてい

たのは、こうした悲劇的な物語的因果律なのかもしれない。だが Sutpen 一族の滅亡を辿る解釈ゲームの中で、Sutpen 達の言わば憑代としての役を担ってきた Shreve と Quentin は、Henry 達亡き後廃墟となった Sutpen 家に棲む、一族の末裔である白痴の青年 Jim Bond に言及するに及んで、南部イデオロギーの核を構成する問題から最早顔を背けることは出来なくなる。Shreve は Sutpen 一族滅亡の経緯と南部の未来について次のように語る。

So it takes two niggers to get rid of one Sutpen, don't it? . . . You've got one nigger left. One Sutpen nigger left. *Of course you cant catch him and you don't even always see him and you never will able to use him. But you've got him there still. You still hear him at night sometimes.* [. . .] in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemisphere. Of course it wont quite be in our time and of course *as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits and the birds do, so they wont show up so sharp against the snow. But it will still be Jim Bond;* and so in a few thousand years, I who regard you will also have sprung from the loins of African kings. (302, 強調は論者による)

ここには、時と共に白人社会に浸透してゆく "the Jim Bonds" の不可視性 (invisibleness) と偏在性 (ubiquity) が看取できる。ここに暗示されている黒人種の捕えどころの無さ (elusiveness) は、南部イデオロギーの人種的アイデンティティに対する破滅的な脅威となる。Shreve が予言するのは、白人種の中に拡散する黒人の血が、所謂 "one-drop rule" の陰画^{ネガ}として白人種の「自明性」を根本から揺るがす黒人の血の散種の可能性である。¹²

同時にこの一節は、Sutpen という白い「原父」が黒人の血を自身の出自に引き込んだことをも暗示する。Quentin が戦慄するのは、南部白人貴族社会の起源に潜むこの禁忌の侵犯の痕跡であり、同時にそれが彼等の過去に於ける「純血性」の神話を否定する、連綿と続いてきた黒い血の浸透の歴史と、Shreve の言葉に暗示された、来るべき未来に於ける白人種の (再) 純化 ([re-] purification) の可能性をも否定する人種混淆の現実¹³に他ならない。

こうした現実¹³は、第二節で確認した、南部イデオロギーという「他者」が措定する物語的前提を成す、「外部的他者に因る蚕食」が齎す南部白人社会の没落という神話的プロットを否定する。Shreve との長い対話の末に Quentin が見出すのは、南部の起源にある暴力的な人種混淆の歴史、即ち「白い南部」の幻想を無効化する "the Jim Bonds" の始祖としての白人像である (Fowler 1997; 109-10, 124-25; 笹田 107-09)¹³。換言すれば、彼が必死に護ろうとする旧南部の幻想——それは Caddy に象徴される、南部白人貴族の歴史的・文化的真正さである——は、「他者」という原初の嘘が隠し続けてきた南部イデオロギーの根本的不条理であり、それはその本質的無意味さと対峙する時に決定的に失われる。だが徹底してイデオロギー的な存在である Quentin は、こうした不可避の現実と折り合いをつけることは適わない。自身の物語の最後で繰り返される彼の "I

dont hate it!" (303) という叫びは、同時に失われた過去の遺産と未来の展望に対する彼なりの最後の抵抗なのかも知れない。

V

これまで *The Sound and the Fury* や *Absalom, Absalom!* に於ける南部イデオロギーという文化的準拠的虚構とその限界を見てきた。ここでは本論の取り敢えずの結論として、こうした南部の過去の問題から、Faulknerが見る幻想の未来に眼を転じてみよう。

Absalom, Absalom! 執筆の6年後、Faulknerは *Go Down, Moses* と題する連作小説を発表する。他の小説同様 Yoknapatawpha を舞台として、18世紀後半から20世紀前半に到る白人貴族 McCaslin 一族の言わば家族史を辿るこの物語のクライマックスは、主人公である McCaslin 家の最後の白人男性 Ike (Issac) の少年期の熊狩りを、成人社会へのイニシエーションとして描いた中篇 "The Bear" である。この物語の終りで、自身の祖先に当たる白人男性 Lucius が、所有する黒人奴隷の女性 Eunice と、その娘 (Lucius 自身の娘でもある) Tomasina との間に、黒白雑婚と近親相姦という二重の禁忌を犯す関係を結んでいたことを発見した Ike は、祖先の犯した禁忌の侵犯という「原罪」に衝撃を受け、遂に生涯自分の子供を持たなかった。だがあたかも *Go Down, Moses* 自体が Faulkner 独特の「反復強迫」に憑かれたかのように、続く短編 "Delta Autumn" に於いては、甥の Carothers (Roth) Edmunds もまた、同じく Tomasina の子孫となる女性との間に庶子をもうけることとなる。この女性が Carothers を訪ねて Ike の元に現れ、再び黒白雑婚と近親相姦の禁忌が破られたと知った時、運命的な反復の呪縛に Ike は強い衝撃を受けて次のように叫ぶ。

Now [Ike] understood what it was she brought into the tent with her [. . .] — the pale lips, the skin pallid and dead-looking yet not ill, the dark and tragic and foreknowing eyes. *Maybe in a thousand or two thousand years in America*, he thought. *But not now! Not now!* He cried, not loud, in a voice of amazement, pity, and outrage: "You're a nagger!" (344)

Ikeはこの女性を「死んだような顔付き」で、「暗く悲劇的で予言的な」不吉さを纏った存在、つまり Ike 自身が依拠した束縛されてきた南部イデオロギーの「他者」としての黒人の脅威の表象と見做す。彼にとって、こうした「他者」が白人のパートナーとしてアメリカで受け入れられるのは「千年か二千年の後」であっても「今ではない」。彼に出来ることは、甥と別れると言う彼女に "That's right. Go back North. Marry: a man in your own race. That's the only salvation for you" (346) と声を掛けて去らせることだけである。だが彼女の「救済 (salvation)」を「北部」での「黒人男性との結婚」に見出す Ike には、彼の生きる場である南部からイデオロギー的「他者」であるこの女性を放逐することで、実際に直面している現実を拒絶し否定しようとする様子が窺える。彼の祖先の Lucius と甥の Roth が繰り返し侵犯することで最早決定的になったとも言え

るイデオロギーの本質的虚偽性の「見せ掛け」に徹底して拘泥する Ike は、しかしそこに新たな喪失の神話を見出さんとしている。失われてゆく南部の原生森に南部白人の純血性を重ねて、Ike は次のように独り言つ。

Chinese and African and Aryan and Jew, all breed and spawn together until no man has time to say which one is which nor cares. . . . No wonder the ruined woods I used to know dont cry for retribution! he thought: The people who have destroyed it will accomplish its revenge. (347)

Ike が予言する南部の未来とは、人種混淆による「本来的／自然な (natural)」人種的・民族的差異の自明性の喪失である。それは前節で Henry や Quentin が直面した人種的越境可能性の現実を未来に向けて投射したものであると共に、そうした未来像は人間による「自然」破壊が南部に齎す報復と見做される。無論 Ike が幻視する未来に於けるこうした差異の喪失は、それ自体南部に於ける白人の人種的純血性とその出自を巡る物語的過程／作用が齎す幻想に過ぎない。だが問題は、こうした喪失を語ることで逆に南部に於ける新たな価値の「自明性」を巡る神話が密かに再生産されていること、つまり、こうした喪失感覚が「過去に於ける差異の自明性」を前提するというイデオロギー的虚構が生じているということだ。こうした因果論的撞着については、Žižek の次の指摘が簡潔な説明となろう。

[T]he paradox [of emergence and loss of some historical quality] is that when a certain historical moment is (mis) perceived as the moment of loss of some quality, upon closer inspection it becomes clear that the lost quality emerged only at this very moment of its alleged loss This coincidence of emergence and loss, of course, designates the fundamental paradox of the Lacanian *objet petit a* which emerges as being-lost — narrativization occludes this paradox by describing the process in which the object is first given and then gets lost. (*The Plague of Fantasies* 12-13, 下線は論者による)

Žižek が強調するのは、「対象の獲得と喪失という過程が物語化される」ことで「それが既に失われたものとして立ち現れる」という欲望の「対象 a」の本質的矛盾である。Ike が目の当たりにする「失われゆく自然 (即ち南部イデオロギー的価値観)」とは、それ自体その喪失の起源となるようなイデオロギー的「他者」に依拠して初めて具現化されるのだ。この意味で、「他者」とはこの南部のイデオロギー的価値観を前提する際に措定されねばならない必須条件であると共に、その価値観を巡る神話的物語の原因／結果と見做されるような対象として、南部イデオロギーの神話化を支える核としての役割を担わされた存在なのだ。

この文脈に於いて、Quentin や Henry、Ike 達南部イデオロギーの信奉者達が、イデオロギー的秩序の崩壊と喪失に拘泥する理由が確認できる。彼等が直感的に理解しているのはイデオロギー的価値観の崩壊という「危機的局面」ではなく、Henry の言う「神は自分達を見捨てていた」という事実、つまり彼等の依拠するイデオロギー的準拠枠の本質的且つ根本的な正統性の不在であり、故にそうした正統性を合理化する物語、つま

りその喪失を自身の主体的価値として意味付ける因果律こそが、彼等が真に必要とするものなのだ。

こうした物語的因果律のためにこそイデオロギー的「他者」の外部性は強調されねばならない。「他者」の本質的内在性=不在については既に述べたが、だからこそ「外部的他者の侵入と蚕食が齎す南部のイデオロギー的崩壊」という南部イデオロギーの文脈の中で、黒人達周辺的存在はこうした崩壊を齎す「外部的存在」としての他者性を付与され、世界の起源と終末の物語が提示するその正統性の構成要素として構造化されねばならないのだ。

ここで南部白人のイデオロギーが黒人達「他者」に要求するのは、Faulkner の Nobel 賞演説の言葉を借りれば「耐える (endure)」ことでありまた「生き延びる (prevail)」ことだ。だが彼等に要求されるこうした忍耐と生存は皮肉に響く。というのも、Faulkner の語る忍耐と生存の美学は、先の Ike の呟きに窺えるように、その維持も回復も白人にとっては不可能であることが明らかになった時点に於いて初めて希求されるものであるからだ。

こうした物語的=イデオロギー的準拠枠の中で、黒人はそれ故、南部の没落を齎す原因(或いは原罪)としての機能を果たすことを期待されていると共に、最早回復不能となった南部の未来という大破局に耐える白人の理想の姿とを二重に引き受けることを要請される。ここでの黒人という「他者」像 (figure) は、南部イデオロギーに基づく白人の理想世界の興亡を正当化するための虚像/文彩 (figure) として南部の「失われた未来」を表象しているに過ぎず、そこに実際の文化的他者としての黒人の実体 (identity) が見出されることはない。

こうした「他者表象」の典型例が、*The Sound and the Fury* の "Appendix" に窺える。Compson 一族の緩慢な破滅を語る他の言説と対照的にこの小説に登場する忠実で献身的な Compson 家の黒人召使 Dilsey について、Faulkner は "DILSEY. They endured." (721) とひと言だけ述べるに留まる。こうした Faulkner の「忍耐」に対する態度は、失われた南部の正統性を信じていた過去と、いずれ白人としての自明性=差異が完全に失われるであろう来るべき未来との間に、消え行く南部イデオロギー的価値観の残滓と、その中でイデオロギー的役割を演じ続けねばならない「他者」としての黒人像とを永遠に宙吊りにすることで、過去と未来の両方の極に於いて明らかにされる喪失の現実を可能な限り引き伸ばそうとする執着の身振りだ。こうした執着の態度の中に時間の推移を空間的に純化し固定しようとする Faulkner の美学があるというのなら、それはイデオロギー的他者に依拠することで自身のイデオロギー的限界と直面することを拒む頑なな姿勢と言わざるを得ない。

従って、ここに、黒人像を「普遍の人間」像 (figure) として理想化する Faulkner の政治的言説に窺える他者表象の限界と問題が窺える。そこに見出される対象は、常に/既に南部イデオロギーのために/によって作り出された虚像に過ぎない。それは黒人という他者を巡る理解と格闘の試みではなく、自身のイデオロギー的スケープゴートとし

での「他者」を跡付けることで自身の自我理想の崩壊を食い止めようとする「南部」の必死の試みなのだ。

こうして見ると、Faulknerを巡る批評は、その「近代的」啓蒙主義の物語としても、テキスト内部の「他者」表象の試みとしても重大な問題を抱えていることが分かる。それは高度に近代化した「ポストモダニズム」の物語の中で失われた「近代的人間像」という虚構を巡る物語であると共に、「南部」というイデオロギー的虚構の起源と喪失を巡る幻想でもある。だが、こうしたことを確認することで、Faulkner批評に於ける「失われた未来」という幻想のゴールに我々は到達した。20世紀のFaulkner批評がこうした問題を巡るイデオロギー的文脈に於いて、一つには新批評派その他の批評が指示するような美的・文学的普遍性の価値として、また一方ではポスト構造主義的文脈に於いて、差異の抹消に纏わる永遠の遅延行為の作用／過程としての他者表象の試みとしてFaulknerを受容してきたとするならば、新たな形のFaulkner批評は「ポスト」モダン的な立場からこうした表象行為を再検証し、そこから立ち現れる全く異なった他者像を辿ること、つまりイデオロギーの「他者」を跡付けることから、他者を巡る批評へと視点を移す試みから始めねばならないだろう。そしてそうした検証に値する他者は確かにFaulknerの中に窺える。だが、そうした問題については、また稿を改めて論じることとしたい。

※本稿は、平成14年度中京大学特定研究助成に基づく研究成果の一部であり、また同研究助成研究課題「再建期後のアメリカ南部における歴史認識とその表象——フォークナーを中心として——」の序論を構成するものである。

註

¹ Faulkner作品が1930年代までの所謂「前期作品群」から、1940年代以降の中期・後期作品群に連れてその作品の傾向が変化していったという指摘については、例えば田中2及び13-19に従った。またFaulknerの批評的評価や彼の伝記的事実については、Blotner, Hamblin & Peek, Fagnoli & Golay, Williamson等を参考した。

² 例えばRobert Penn Warren (1966: "Introduction")は、Faulknerが南部の生活の奥にある生の現実を描いていると見ているし、Malcolm Cowleyは*The Portable Faulkner*の序文で、Faulknerの作品は南部の生の同じパターンを繰り返し語る「南部の神話乃至伝説 (a myth or legend of the South)」(xx)であると要約する(xv-xx)。またGeorge Marion O'Donnellは、Faulknerの南部白人の家系が伝統的な南部の栄光と没落のロマンティックな神話を描き出していると見ている。

このように、特に1970年頃迄のFaulkner批評は、作品に於ける南部の歴史や時代精神の持つ現実性(reality)と独自性を以て作品や作家の評価する傾向が強い。

³ 例えば意味作用の生成(とその失敗)の過程乃至形状をFaulknerの現代作家としての特徴とする観点から理解しようとするDonald M. Kartiganer (1979)をこの種の議論の嚆矢とし、ポスト構造主義的文学理論を援用してフェミニズム的立場からテキストの差異と性差の問題を追及

する Minrose C. Gwin の研究や、テキストの生成としての／の過程の「声」、特にテキストの「外部」へと響く "ortorical voice" に着目して Faulkner の語りを扱う Stephen M. Ross らは、明確に 1960 年代以降の構造主義-ポスト構造主義的潮流を意識した批評実践である。同時に、Lacan 派精神分析に基づいて Faulkner に於ける人種とジェンダー表象の問題を論じる Doreen Fowler (本論は Fowler に負うところが大きい) や、社会的・文化的マイノリティの(不)可視性や非正統性とを共同体の問題と絡めて扱う John N. Duvall 等の批評家には、ポスト構造主義的手法を採りつつも再び歴史的な文脈に Faulkner を開いてゆく試みも窺える。

⁴ Fowler (2002; 97) は、こうした南部の社会の興亡を巡るイデオロギー的物語を、Lyotard に依拠しつつ「父権性という南部のマスター・ナラティブ (the South's master narrative — the patriarchal order —)」と指摘し、Faulkner の小説、特に *Absalom, Absalom!* と *The Sound and the Fury* に、こうしたマスターナラティブに則った、過去の改訂しようとするポストモダニズム態度を看取している。

⁵ "Faulkner used women and blacks as doubles for the white male protagonist" (ix) と断じる Fowler の言葉に明確なように、Faulkner に於いて女性と黒人は白人男性が依拠する世界に於ける自身のイデオロギー的対立項と見做されている。Fowler は、こうした対立項という "others" に対する男性主体の "forbidden desires" (xi) の葛藤と園限界を、Lacan 的文脈に於いて展開しつつ議論している。

⁶ Faulkner に於いて、人種混淆を宗教的文脈の中に位置付けて理解する例としては、例えば *Light in August* のカルヴィン主義者である Joanna Burden や Doc Hines 等が挙げられる。Joanna の亡父は、幼い彼女に次のような神の呪いについての説教をする。

You must struggle, rise. But in order to rise, you must raise the shadow [of the black people] with you. But you can never lift it to your level. [. . .] But escape it you cannot. The curse of the black race is God's curse. But the curse of the white race is the black man who will be forever God's chosen own because He once cursed him. (253)

Joanna はこうした「神の呪い」の贖罪を通じて自己を救済するために黒人救済事業を行なっているが、ここには黒人種を「神の呪い」という清教徒的決定論的文脈の中で規定し、そこに南部の白人社会の問題を全て還元しようとする態度が窺われる。

同様の因果論的還元は、自分の娘が身籠った庶子 Joe Christmas を、娘の犯した罪に対する神の呪いの顕現と見做してその破滅を待望する老人 Doc Hines の動向にも確認できる。孤児院に送られた少年の Joe が仲間の孤児に "Nigger! Nigger!" (382) と呼ばれるのを聞き、そこに神の意思を読み取る Hines の狂信的態度は、人種という範疇が南部の白人の文化的・社会的文脈に規定される "simulacrum of [the black race] made by the white race (Mori 1995, 57) であることを示唆している。

Light in August に見られるこうした人種の文化文脈依存性と南部の宗教的狂信主義との関連についての詳細は、拙論 "Murdering America" を参照のこと。

⁷ Freud から Weiss へ宛てられた書簡とその分析については、同じく Žižek の *For They Know Not What They Do* 第一章も参考にした。

⁸ こうした時間の歴史化に関する虚構概念については、Frank Kermode に拠っている。Kermode は、例えば秒を刻む時計の「チクタクという音 (tick-tock)」のリズムの中に時の推移を「人間化する (humanize)」ある種の「虚構性 (fiction)」を看取し、こうしたリズムを「時に

[始まりと終りという]形式を与える事によってそれを人間化する機構、プロット (a plot, an organization that humanizes time by giving it form)」(45) と呼ぶと共に、「このチクタクという音の間隔は、人間化される必要のある純粹に継続的な混沌を表す (the interval between tock and tick represents purely successive, disorganized time of the sort we need to humanize)」(45) と見做して両者を区別している。彼は前者を有機的で終末 (と同時に始まりも) を前提する「有意義な時節 (significant season)」に満ちた「カイロス (kairos)」的時間、後者をそうした要素を持たない「クロノス (chronos)」的時間と呼んで、小説と言う虚構 (fiction) はこのクロノス的時間 (即ち、有機的な意味を伴った人間の生) を描くものと見做している (45-47)。

こうした例から見れば、Quentin が時計が時を刻む秒針のカチカチという音や校庭のチャイムに強迫的に憑かれ、それから逃れようとしたのは、彼にとってそれらがクロノス的時間であることを止めた無機的な時の推移を意識させるものであったからとも言える。

⁹ 付け加えれば、クロノスとカイロスを巡る議論の中で Kermode が語る「[チクタクの] チックはささやかな創世記であり、タックは弱々しい黙示録である (Tick is a humble genesis, tock a feeble apocalypse)」(45) という一文は、人間化 (= 虚構化/物語化) された時が、いかにキリスト教的な始まりと終りの含意に満ちているかをも暗示している。

¹⁰ *Absalom, Absalom!* に於ける南部イデオロギーと人種混淆の禁忌を巡る「欲望の実現不能性」については既に論じている。詳細は拙論「『宿命』という幻想」を参照のこと。

¹¹ *Absalom, Absalom!* に於けるメタフィクション性については種々議論があるが、例えば Martin Kreiwirth は、それを「物語の中で描かれたことは事実か否か」という観点から作品を理解しようとする "either/or" というリアリズム的乃至モダニズム的観点ではなく、いずれの解釈も、相互に矛盾しつつ同時に正しく真実でもありえるような "both/and" の原理によって成立する言説世界として Yoknapatawpha、そして *Absalom, Absalom!* を理解しようとする読解を示している。こうした観点からこの作品を読むならば、この作品が語り手達の「声」によって構成されているということの意味は明確となる。語り手達は字真意としての謎である Sutpen の Bon の母親との離婚と、Henry の Bon 殺害の理由を、それぞれが依拠するイデオロギー的準拠枠に沿って文字通り「解釈」してみせる。彼等の解釈への反復強迫を齎すこれらの謎がイデオロギー的に了承し得る物語として完結する地点、つまり彼等の解釈の連鎖が終了する地点が、即ちこの小説の結末となっている。

従って、実際に Bon に黒人の血が混じっていたのかどうかは、事実としては定かではない (実際、それは Quentin と Shreve の誤解に基づく妄想でもあり得る)。だが、Kreiwirth 的観点からすれば、他の語り手達が説明不能なこの謎を巡って Quentin と Shreve の二人が解釈を繰り返すこと自体が、この小説をポストモダン的なものとして特徴付けている重要な特質であり、作品の提示する重要な現象であるのだ。つまり、こうした解釈が成立するということが、作品のイデオロギー的偏向を何よりも如実に物語っているのである。

¹² 南北戦争前後の所謂 Jim Crow law の概念は、1896 年の Plessy v. Ferguson 等の例にも明らかであるが、基本的には黒人種を "A person of mixed white and Negro blood should be returned as a Negro, no matter small the percentage of Negro blood." と定義する純血主義的なものであり、こうした黒人定義についての通念を、通常 "one-drop rule" と呼ぶ。詳細及び典拠については Sundquist 168-69 参照のこと。

¹³ 南北戦争以前の所謂旧南部は、奴隷制を経済的基盤としたプランテーション貴族社会であっ

た。この社会では、例えば Fredrick Douglass や Harriet Jacobs 等の奴隷体験記に明らかなように、しばしば黒人女性奴隷は奴隷主の所有財産であると共に、性欲の対象ともされていた (Douglass 15-16; Jacobs 31-32; 笹田 108)。こうした記録が示すまでもなく、一般に白人と黒人の混淆は、白人男性が黒人女性を性的対象とすることが当然のこととされた当時の社会背景に根差すものであった。

引用文献

- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1956.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha County*. 1963. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990.
- Cowley, Malcolm, ed. *The Portable Faulkner*. 1946. Revised ed. Harmondsworth: Penguin, 1977.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*. 1845. *Autobiographies*. New York: Library of America, 1994. 1-102.
- Duvall, John N. and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner and Postmodernism: Faulkner and Yoknapatawpha 1999*. Jackson: UP of Mississippi, 2002.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Fargnoli, Nicholas A. and Michael Golay. *William Faulkner A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Facts On File, 2001.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. New York: Vintage, 1990.
- "Address upon Receiving the Nobel Prize for Literature." Cowley 723-24.
- *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage, 1990.
- *Light in August*. 1932. New York: Vintage, 1990.
- "1699-1645 Appendix: The Compsons." Cowley 704-21.
- *The Sound and the Fury*. 1929. New York: Vintage, 1990.
- Fowler, Doreen. *Faulkner: The Return of the Repressed*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.
- "Revising *The Sound and the Fury: Absalom, Absalom!* and Faulkner's Postmodern Turn." Duvall and Abadie 95-108.
- Freud, Sigmund. *Totem and Taboo*. 1913. Trans. James Strachey. Ed. Albert Dickson. *The Origins of Religion: Totem and Taboo, Moses and Monotheism and Other Works*. Penguin Freud Library Ser. Vol. 13. Harmondsworth: Penguin, 1990. 43-224.
- Gwin, Minrose C. *The Feminine and Faulkner: Reading (Beyond) Sexual Difference*. Knoxville: U of Tennessee P, 1990.
- Hamblin, Robert W. and Charles A. Peek, eds. *A William Faulkner Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1999.
- Jacobs, Harriet. *Incidents in the Life of a Slave Girl*. 1861. Ed. Nellie Y. McKay and Frances Smith Foster. Norton Critical Ed. Ser. New York: Norton, 2001.
- Kartiganer, Donald. M. *The Fragile Thread: The Meaning of Form in Faulkner's Novels*. Amherst: U of Massachusetts P, 1979.
- "In Place of an Introduction: Reading Faulkner." Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie,

- eds. *Faulkner at 100: Retrospect and Prospect: Faulkner and Yoknapatawpha*, 1997. Jackson: UP of Mississippi, 2000. xiii-xxvi.
- Kermode, Frank. *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction*. London: Oxford UP, 1966.
- Kreiwirth Martin. "Intertextuality, Transference, and Postmodernism in *Absalom, Absalom!*: The Production and Reception of Faulkner's Fictional World." Duvall and Abadie 109-23.
- Lacan, Jacques. *Écrits: A Selection*. Trans. Alan Sheridan. 1966. New York: Norton, 1977.
- Miller, J. Hillis. *Topographies*. Stanford: Stanford UP, 1995. 192-215.
- Mitchell, Juliet and Jacqueline Rose, eds. *Feminine Sexuality: Jacques Lacan and the École Freudienne*. Trans. Jacqueline Rose. Houndmills: Macmillan, 1982.
- Mori, Arinori. "Murdering America: Segregation and Racial Consciousness in *Light in August*." *Ivy* 28 (1995): 45-68.
- 森 有礼 「『宿命』という幻想——*Absalom, Absalom!*における欲望の不可能性——」『中部アメリカ文学』5 (2002): 29-42。
- O'Donnell, George Marion. "Faulkner's Mythology." 1939. Warren, 23-33.
- 笹田直人 「欲望と禁忌——フォークナーにおける人種混淆の回帰」『ユリイカ——詩と批評——』29. 15 (1997): 106-19。
- Schwartz, Lawrence H. *Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literary Criticism*. Knoxville: U of Tennessee P, 1988.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. 1606. Ed. Kenneth Muir. London: Routledge, 1984.
- Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: John Hopkins UP, 1983.
- Sykes, John. *The Romance of Innocence and the Myth of History: Faulkner's Religious Critique of Southern Culture*. Dissertation Ser. No. 7. Macon: Mercer UP, 1989.
- 田中敬子 『フォークナーの前期作品研究——身体と言語』東京：開文社、2002。
- 寺沢みずほ 『民族強姦と処女膜幻想——日本近代・アメリカ南部・フォークナー——』東京：御茶の水書房、1992。
- Warren, Robert Penn, ed. *Faulkner: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs: Orentice-Hall, 1966.
- "Intorduction: Faulkner: Past and Present." Warren 1966, 1-22.
- Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. New York: Oxford UP, 1993.
- Žižek, Slavoy. *For They Know Not What They Do: Enjoyment as a Political Factor*. 1991. 2nd ed. London: Verso, 2002.
- *The Indivisible Remainder: An Essay on Schelling and Related Matters*. London: Verso, 1996.
- *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*. Cambridge: MIT, 1991.
- *The Plague of Fantasies*. London: Verso, 1997.